

【一般口演3】 第9席

『黄帝内経』における“刺法”と“鍼法”

宮城 小川 はるな 甲斐 淳子

『黄帝内経』は中国の伝統的な医学を伝える基本的な文献であり、『素問』と『靈枢』とを併せて『黄帝内経』と通称される。

『黄帝内経』は湯液の記載を些か含むものの、特に鍼灸による治療を主な内容としていることが知られている。それならば鍼灸治療における行為を直接示している“鍼”と“刺”両語の用法は、しかるべき検討を必要とするべきものであり、さらには範囲を拡げて『黄帝内経』諸注釈においても精査されなければならないものであると考えられる。

『黄帝内経』に伝えられる“鍼”“刺”という二つの語の用法は、現在一般的に考えられているそれとは微妙に、また大きく異なっている。両者の関連は、“鍼”を“刺”すという単純な行為を示す述語補語の関連ばかりではなく、それぞれ独特の意味と関係を有しており、それが、鍼の種類や品質・刺針技術の変化、さらには時代による変化に伴い、その概念も変わってきたと想像されるのである。

本発表は、それらを説き明かす糸口として、まず『黄帝内経』本文を中心に“鍼”と“刺”の二つの語について、それぞれ検討を加え、その性質を明らかにする手がかりを得ようとするものである。検討に際しては『素問』は明顧從徳翻刻『重校補注黄帝内経素問』を、『靈枢』は明刊無名氏本を使用し、“鍼”“刺”の語を抜き出し、個々の使用状況についての検討を行なうこととした。

この検討を行なうことは、『黄帝内経』の伝える鍼灸の施術法についてより正確な情報を得ることにつながる。それはひいては鍼灸の有るべき姿を考え直す契機になるものではないだろうか。